

活動実績報告書

2025年度(令和7年度)



公益財団法人 河野臨床医学研究所

- 第三北品川病院
- 品川リハビリテーション病院
- 介護老人保健施設ソピア御殿山

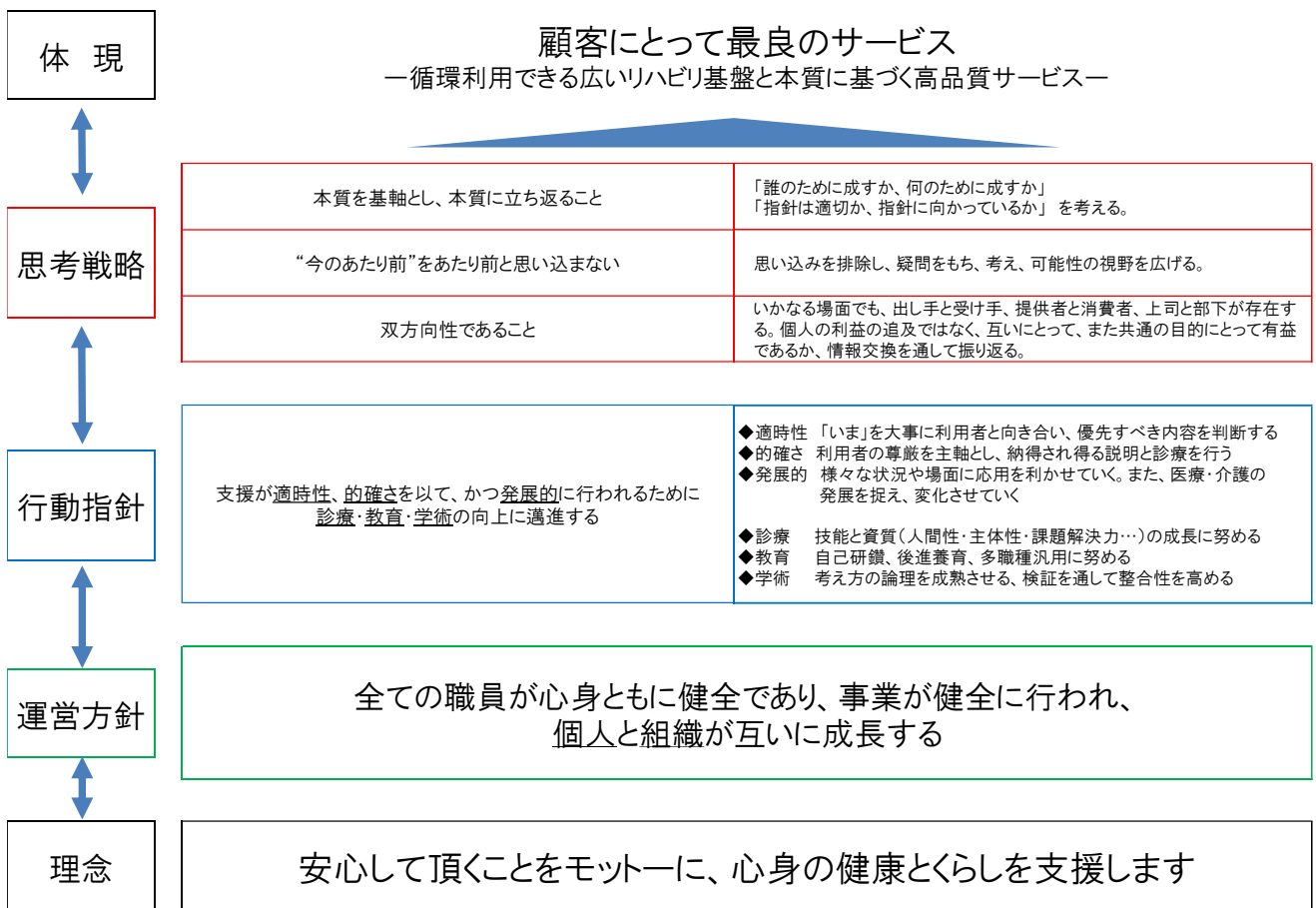
リハビリテーション技術部

目次

・リハビリテーション技術部 Grand Design	・・・	p.3
・リハビリテーション技術部・課統括	・・・	p.4
・第三北品川病院	・・・	p.5
・品川リハビリテーション病院		
5階 回復期病棟	・・・	p.6
6階 回復期病棟	・・・	p.7
7階 医療療養病棟	・・・	p.8
在宅支援部門（訪問・通所）	・・・	p.9
・介護老人保健施設ソピア御殿山（入所）	・・・	p.10
資料		
I. 診療実績	・・・	p.11
II. 学術活動	・・・	p.15
III. 課内研修	・・・	p.15
IV. 臨床実習受け入れ状況	・・・	p.16
V. 講演・地域活動・出版	・・・	p.17
VI. 各部会（委員・評議員・講師・理事等として参加）	・・・	p.17

リハビリテーション技術部

Grand Design



課のメンバーとして持つ理念、対象者に最良のサービスを届ける役割を全うし続ける上で、個とチームで考える基盤、行動の指針をまとめたものです。

職員個々と組織が対等の関係性を保ち、互いに育み合う土壌と文化を大切にしていきます。

リハビリテーション技術部リハビリテーション課 統括

－事業の基軸－

求められる役割に対し、一步先を見据えた実践に向けてどのような準備を行い、どのような付加価値を見出すか。この問いに向き合いながら、療法士個々の能力（個の力）を育むと同時に、それを組織としての価値提供へと繋げる「組織力」の向上に注力した1年でした。私たちが目指すのは、療法士が創意工夫を凝らし、主体的に価値を提供し続けていく文化の構築です。全ての職員が心身ともに健全であり、個人と組織が互いに高め合う土壌を大切にしながら、リハビリテーションサービスの質を問い続けてまいりました。

－回顧・展望－

専門性の継続学習においては、有資格1～3年目の若手層に対し、成長のプロセスをより鮮明なストーリーとして再構成しました。1年次の「各論学習」から、2年次の「臨床推論」、そして3年次の「文献抄読会」へと至る一貫通貫の学びの形を整え、半期ごとのキャリア研修を軸に、臨床家としてのアイデンティティ形成を支援しました。また、資格取得や継続的な総合力の涵養に向けて、学びの機会そのものを拡充し、専門性と実践力の双方を高め続けられる基盤づ

くりを進めました。さらに、新昇格の主任・係長を対象としたワークショップを年間通して開催し、マネジメント層としての教養の深化を図っています。

組織運営の面では、技術部を構成する複数部門がそれぞれ自走しつつ、部門間の連携・協働が途切れることなく続く「メンテナンス」が重要テーマでした。その中で、委員会や各部署、各部門において、ありたい姿の実現に向けた推進や、課題解決に向けた具体的な行動の自走性が高まりつつあることは、本年度の大きな前進であったと捉えています。私どもの最大のメリットは、急性期から生活期まで、医療と介護のリハビリサービスをシームレスに行える土壌を有していることです。しかし、この強みを十分に活用できていない側面があることも、多くの職員が共通の課題として認識しています。

今後は、既存の型を重んじつつも新たな価値を創造する「守破離」の精神、そして物事の核心を突く「本質の問い」を通じ、部門や職種の垣根を超えた融和を図ってまいります。教養を高め、思考を柔軟に広げることによって、当法人のインフラを最大限に有効活用し、患者・利用者様へ最良のサービスを届けるための実践を継続してまいります。

(小林)

第三北品川病院

—実務実施状況—

1. 人員体制

外来部門は、PT4 名体制で開始し、6 月から入院スタッフ 2 名を午前中のみ外来、午後は入院患者担当の兼務での働き方を半年間行いました。目的は、入院からの外来フォローとなった方の経過を追うことでした。12 月以降で、入院のみの業務に戻り、その分 PT1 名を外来専従として加入しました。

入院部門は PT9 名、OT 3 名、ST1 名で、年度途中で 3 名の PT、1 名の OT、1 名の ST が退職しました。新卒採用はありませんでした。また、6 月から 2 か月間 2 名のスタッフの回復期への出向がありました。

2. 実績報告

外来部門の新患数は 298 件、実施件数は脳血管 103 件、運動器 6,780 件でした。8 割は整形外来からの新規受診者で、2 割は入院からの引継ぎとなっています。脳血管疾患患者も退院後のフォローアップとして担当する機会もありました。

入院部門では、対象患者数は 888 名で新患別内訳では、運動 553 名、脳血管 252 名、廃用症候群 83 名でした。在宅復帰と、入院後の転帰先の見立てを早く行う取り組みにより、在院日数が短縮されました。

—取り組み—

外来部門での取り組みでは、健康教室を

半期に一回通院患者さんを対象に行い、各回 15～16 名の参加をいただきました。内容としては、フレイルの事を中心に整形外科医師の講話と、療法士による実技を行い好評をいただきました。また、その様子をブログにし、ホームページ上で情報発信を行いました。

入院部門では、全員による症例報告と、疾患別での疾患の理解とそれに対するリハビリテーションの取り組みをスタッフ個々が発表する場を作り、実質的な勉強会を開催しました。後半では、整形外科医師とともに、股関節術後の患者に対し、スムーズな、痛みのない生活を獲得するというを目的に、プロトコル作成と病棟、外来とともに入院前から退院後までを一連の流れの中で、より効率よく、効果的にすすめる事に取り組みました。

—展望—

2026 年度の診療報酬改定では、“早期介入 × 病棟常駐 × 365 日提供”を軸に、リハ部門の働き方・配置・評価が全面的に変わる改定となっています。課題としては、人員の確保と運用の再設計です。それぞれの療法士が自分の生活も含め、働き方も変わっていく中で、いかに患者・患者家族のニーズをとらえて、そこにフィットしたサービスを提供できていくかが課題だと考えます。

(横尾)

5階 回復期リハビリテーション病棟

－業務体制－

年度開始時に管理体制が変わりました。新卒採用4名を迎え、他部署からの一時的な応援スタッフや産休等のスタッフもあり人員は変動しましたが、平均22.8名で業務に取り組みました。

－業務状況－

新規患者数186名、退院数189名、患者一人当たりの平均リハビリ提供単位数は5.98となっています。また、平均入棟日数は65.5日、実績指数は53.36、在宅復帰率84.9%、年齢層は80歳以上の患者が占める割合が58%となっており高齢者が多い傾向は続いています。

－主な取り組み－

管理体制が変更されたこともあり、あらためて回復期病棟として何を大切に、どこを目指して業務に取り組むかという意識の統一を図るべくスタッフ皆で職種別と病棟の目標を決めるディスカッションを実施しました。結果、病棟目標を『その人らしい人生と生活を大切に、専門職として根拠のあるリハビリテーションを病棟全体のチームアプローチで実践しよう』と皆で決めることができました。ICFの理念に立ち返り、活動と参加を意識した関わりを各々が模索し

てくれています。

1：集団リハビリテーションの提供

集団リハビリテーションの提供で、活動量の増加はもちろん、他者との関わりによる意欲の向上、社会性の回復、孤立感の軽減を実感しています。ご家族様も喜ばれておりますので、今後も定期的に提供できる体制を整えていきます。

2：病棟からの訪問リハビリの提供

在宅支援部と連携し、退院後の生活に向けてシームレスな支援を行うべく、生活が落ち着く時期まで入院中に担当したセラピストが訪問リハビリを提供できるように働きかけました。年間で10件実施し(前年度4件)、継続した支援の必要性をスタッフも意識できています。

3：病棟との連携

リハビリ時間以外での活動を増やす取り組み(病棟リハ)やリスク管理・知識の共有の場として看護部と共同で勉強会を開催しています。例年のお花見企画も実施することができました。

－今年度の展望－

カンファレンスの充実を病棟全体で掲げています。より一層、活動と参加を意識し退院後の生活を見据えた支援のあり方を検討していきます。(鴨志田)

6階 回復期リハビリテーション病棟

－業務体制－

係長 1 名を統括責任者として配置し、その下に PT・OT・ST それぞれの主任を中心とした管理体制を構築しました。各職種の専門性を活かした役割分担を明確にし、主任が現場と管理の橋渡しを担うことで、迅速な情報共有と的確な判断が可能となり、安定した病棟運営につなげてきました。

族と在宅生活の具体的なイメージを家族指導や外泊を通じて共有し、不安の軽減と円滑な生活移行を目指しています。加えて、サービス担当者会議への参加により直接やり取りを行うことで多職種間の連携を強化し、地域スタッフへの情報共有や引継ぎも円滑に行っており、切れ目のない支援の実現ができるような取り組みを実施してきました。

－業務状況－

新規入院数 187 名、退院数 193 名で推移し、年間を通して概ね計画通りの運営が行えました。平均入棟日数は 70 日(昨年度 76 日)、実績指数は 55.7(昨年度 48)となり、リハビリテーション効果を維持しながら対応してきました。また、自宅復帰率は 65.8%(昨年度 74.8%)となり、在宅生活を見据えた支援の成果が一定程度表れた一年となりました。

－今年度の課題と展望－

退院支援の質をさらに高めるために、動画などで情報共有方法を工夫し、関係職種間で統一した理解を持てる体制の構築が重要であると考えます。また、患者様自身だけでなくご家族様とともに退院後の生活を具体的に考える支援を充実させ、現実的で継続可能な生活設計につなげていく必要があります。さらに、栄養や排泄に関するチーム活動を充実させ、多職種が連携しながら生活全体を支える体制を強化することで、安心して在宅生活を送れる支援の実現を目指していきます。

－取り組み－

退院支援においては、担当者による継続的な関わりが重要であり、外来や訪問によるフォローアップを若手スタッフの約 8 割が実施することができました。また、退院後調査も 7 割のスタッフが経験しており、在宅移行後の生活実態を把握する取り組みを進めています。さらに、退院前から患者・家

(永井)

7階 医療療養病棟

－人員体制－

スタッフ数は15名（PT10、OT3、ST2）で年度を開始しました。2月に9名（PT6、OT2、ST1）となりましたが、各々が責任感を強く保ち、主体性を持って業務に臨むことができました。また、PT1名が主任に昇進し、新たなチーム体制となりました。

－業務状況－

新規入院数は122名（前年度172名）、退院数は121名（165名）で、入院患者の平均年齢82.9歳（82.6歳）、在宅復帰率5割（5割）でした。実際にご自宅への退院はそのうちの5割（7割）で、平均入院期間は59.8日（59.5日）でした。また、介護老人保健施設へ退院の9割以上が法人内のソピア御殿山への入所であり、シームレスな連携が実践されました。リハビリテーション（以下：リハ）算定期限超過患者様の毎月末時点での平均数は20.5名（12.7名）でした。

当院の特色ある治療である、パーキンソン病の短期集中リハプログラムの利用患者数は6名（5名）でした。

－主な取り組み－

1：長期療養患者様に対する取り組み

入退院の動向が減少し長期療養患者様が増加したことで、リハ時間以外の離床促進のために病棟職員と協力して患者様の作業活動を行い、河医研総会にて発表しました。在宅復帰率は、前年と同程度の割合を維持

することができました。

褥瘡の新規発生は、上半期0件、下半期数件の結果でした。病棟職員の入れ替わり時期とも重なり、褥瘡委員会を中心に改めてポジショニング勉強会を実施することで病棟職員との連携を図り、2月以降の新規発生を0件に抑え、持ち込み患者様も含めて治癒にもつなげることができました。

2：パーキンソン病プログラム

専門資格であるLSVT®を新たにPT1名が取得しPT3名（常勤2名、非常勤1名）とST1名となった他、パーキンソン病療養指導士をOT1名が取得し、受け入れ体制を整えました。また、パーキンソン病プログラムの普及に向けた取り組みを企画したものを公益財団法人が設置する基金へ応募し、当院での取り組みを外部へ発信しました。

－2026年度の取り組み－

引き続き長期療養患者様の割合が高い状況が予測されるため、当病棟の3本柱である①準回復期機能、②長期療養に向けての介護連携機能、③看取り機能、としての役割を果たすために、病棟職員との連携強化を図ることで、安心・安全な環境整備や退院支援を提供してまいります。

また、パーキンソン病プログラムの新規および、2回目以降の利用につなげるように、外部機関への働きかけも含めて、広報活動に注力していきたいと考えております。

（堀切）

在宅支援部門（訪問リハ・訪問看護・通所リハ）

－振り返り－

今年度は、退院後の生活を見据えた支援体制づくりと、多部門連携によるシームレスなケアの充実に取り組みました。病棟・訪問・通所・入所・外来サービス間での情報共有を進め、利用者様の生活状況に応じた継続的な支援体制の構築を図った一年となりました。

－業務実績－

訪問リハビリ・訪問看護では、新規利用者数 35 名、卒業数 40 名、総利用者数 118 名でした。そのうち、病棟で担当したスタッフが退院後の訪問リハビリも継続して担当したケースは 13 件でした。

通所リハビリでは、新規利用者数 33 名、卒業数 24 名、総利用者数 104 名でした。また、総利用者数 104 名のうち、財団内サービスを併用された利用者様は 52 名（50%）でした。

－目標と取り組み－

訪問リハビリでは、訪問リハビリチェックリストの運用を開始し、病棟スタッフが退院前から訪問リハビリの適応を検討しやすい体制づくりを進めました。以前に比べ早期退院や急な退院に伴う自宅環境調整やサービス調整が必要になった際に病棟と連

携して解決を図る場面も増えており、退院支援を通じた連携強化を進められています。

通所リハビリでは、サーキットリハビリの内容を見直し、体力測定結果をもとにグループ分けを行うことで、個々に応じた運動負荷量の最適化を図りました。また、老健入所部門とのミーティングを通じて、通所・入所・ショートステイ利用者への継続的な支援体制づくりに取り組みました。

－展望－

今年度は、日本地域理学療法学会学術大会にて「退院後訪問リハ利用者の生活混乱期における問題発生を予測するリスクスコア」を発表しました。今後も、退院直後の生活混乱期を見据えた退院支援の質向上に取り組んでいきたいと考えています。

－展望－

来年度も、多部門連携を強化しながら、利用者様が安心して地域生活を継続できる支援体制づくりを進め、医療・介護複合施設としての強みを活かしたシームレスケアの充実を目指していきます。

（山崎）

介護老人保健施設 ソピア御殿山（入所係）

—業務体制—

スタッフ数は平均 8 名程度であり PT3～4 名、OT2～3 名（内 1 名非常勤）、ST1 名でした。産育休による年度内の入れ替わりはありましたが、フロア専属スタッフの配置等を随時変える事で、短期集中リハビリは週 6 回以上、認知短期リハビリは週 3 回以上を保つことができました。

—業務状況—

入所者総数は 154 名、退所者総数は 148 名で 45 名が居宅への退所でした。ショートステイの利用者は総数 134 名であり、月平均 3.1 名でした。去年度の夏季辺りから経営方針の転換もあり、長期使用入所者が増え、ショートステイの利用者が減ったことが数字に表れています。

以下、主たるリハビリテーション課の年度目標に対する取り組みについて触れていきます。

1) 老健の一日をコーディネート

毎日実施している昼食前の全体体操の定着をはじめ、リハビリレクリエーションの定期開催として毎週土曜日のボッチャやパターゴルフ、不定期開催のかるた・カラオケ・ボーリングなど、少しずつ拡充を図ってきました。

2) 専門性の高いリハビリテーションの提供

各職種別での勉強会の継続、施設や病院スタッフ向けの腰痛予防啓発活動、全老健主催の現地研修事業専門実技修得コースリハビリテーションなどを行いました。

3) 日常的に ADL 訓練が出来る環境

入浴評価に加え、昼食時の食事姿勢の評価とポジショニングを実施しています。

他にも各スタッフのデイケアへの出向を進め、OT を中心に認知機能の評価と支援を実施しました。また、訪問スタッフへのフォローにもつながりました。さらに、デイケア・入所部門・リハビリ間で情報共有の場を設け、現場での目標設定や対策の検討を進めました。

外部ボランティアさんの活動やブログの開設を通じて、地域との交流も生まれたと思っています。

—今後の展望—

2026 年度は、5 月より訪問リハビリ事業が開設され、提供サービスが 3 サービスとなります（ショートステイ・デイケア・訪問リハビリ）。また、超強化型にも移行します。臨機応変に対応する事が今まで以上に求められることが予想されますが、3 サービスの充実化にむけて、アイデアを出し、各部門と協働して参ります。（北村）

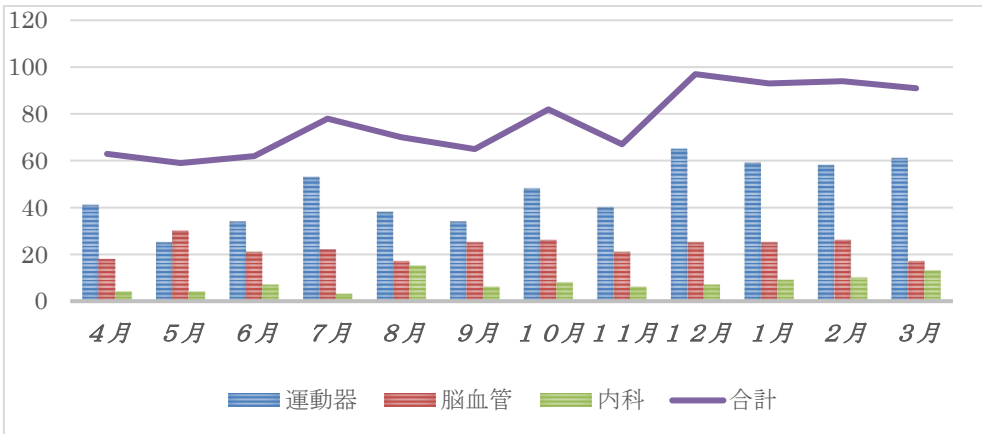
資料

I. 診療実績

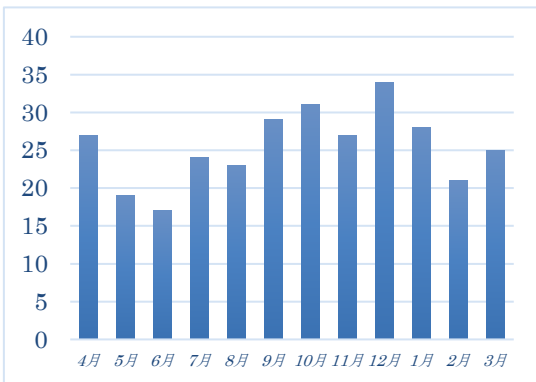
1. 第三北品川病院

① リハビリ新規処方数（件）

－入院－

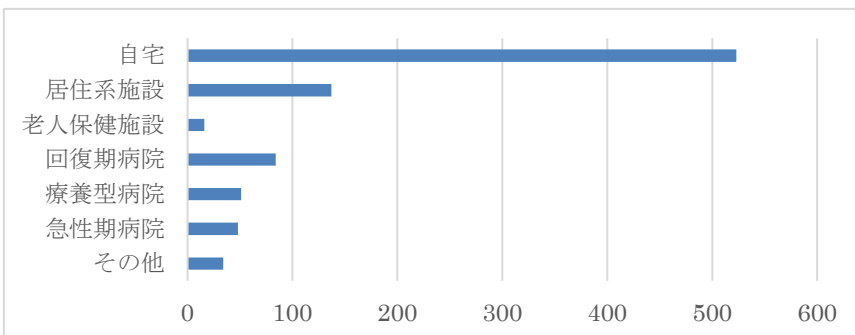


－外来－



入院患者の診療科分類は、整形外科6割、脳外科3割、内科1割でした。外来の新規依頼は305件、整形外科が主体ではありますが、脳血管疾患も7件ありました。

② 退院先

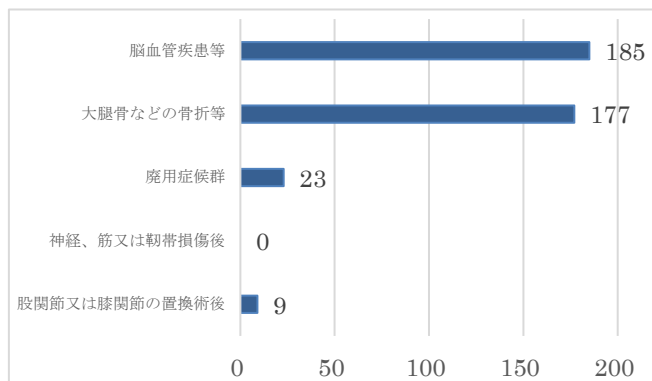


例年通り自宅に帰られる方が多い状況です。引き続きリハビリを必要とされている方は、品川リハビリテーション病院など回復期病院に転院されています。

2. 品川リハビリテーション病院

1) 回復期リハビリテーション病棟 (5/6 階病棟合算)

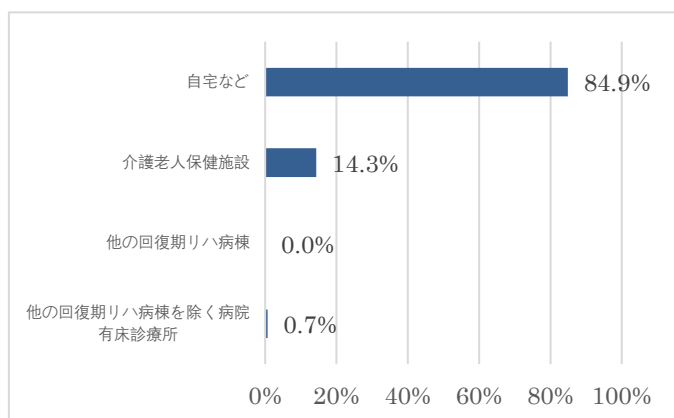
① 対象者 (再入院を除く)



対象者は 394 名でした。

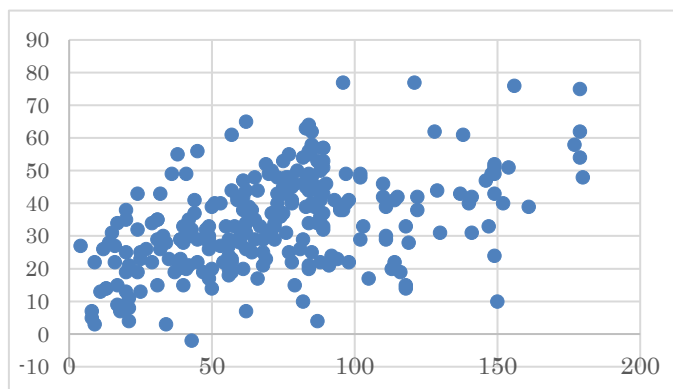
② 退院患者情報

・退院先 (回復期リハビリテーション病棟算定法に準ずる、%) n=279



自宅と居宅系施設を併せた
在宅復帰率は 84.9% でした。
(全国平均 78.8%)

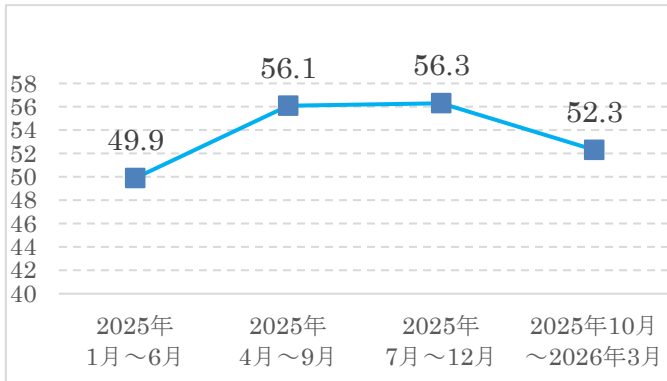
・入院期間 (横軸) と FIM 改善点 (縦軸) ※実績指数の計算対象者 n=266



FIM は「日常生活の実行状態」を
点数化した指標 (全 18 項目、126 点
満点) です。
中央値 33 点、最高値 77 点、
入院期間 71.9 ± 14.7 で、昨年度よ
り 1.7 日短縮しました。
(全国平均 64.9 日)

・入院期間（横軸）と実績指数（縦軸）

※実績指数の計算対象者 n=266



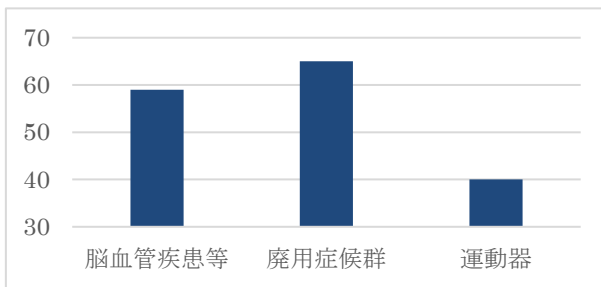
実績指数は、「リハビリでどれだけ生活動作が改善したかを示す1指標です。「回復期リハビリテーション病棟入院料1」では、実績指数が「40以上」であることが要件となっています。

(全国平均：49.8)

※全国平均は2025年2月に発表された「回復期リハビリテーション病棟の現状と課題に関する調査報告書」の値です。

2) 医療療養病棟（7階病棟）

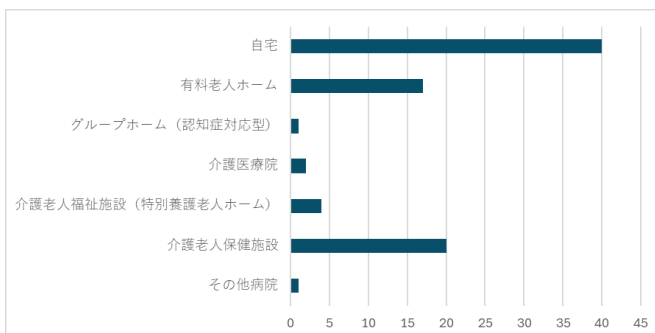
① 対象者情報



総数165名、全ての方にリハビリを実施しております。

パーキンソン病に特化した短期入院リハビリプランは、6名の地域在住の方がご利用されました。

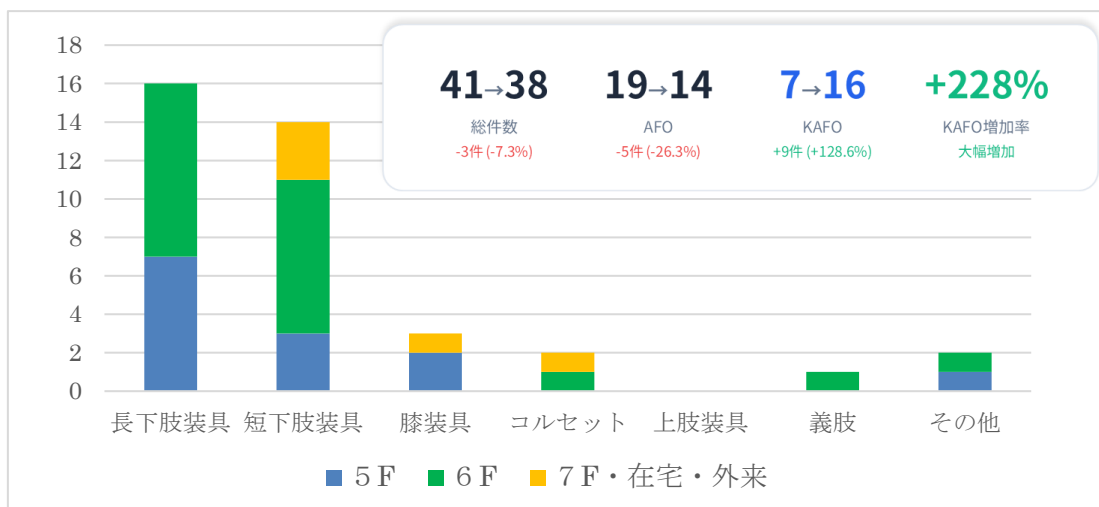
② 退院者情報（予定退院）



入院期間は、平均109日、中央値91日でした。

自宅退院の方は平均59日、中央値57日でした。

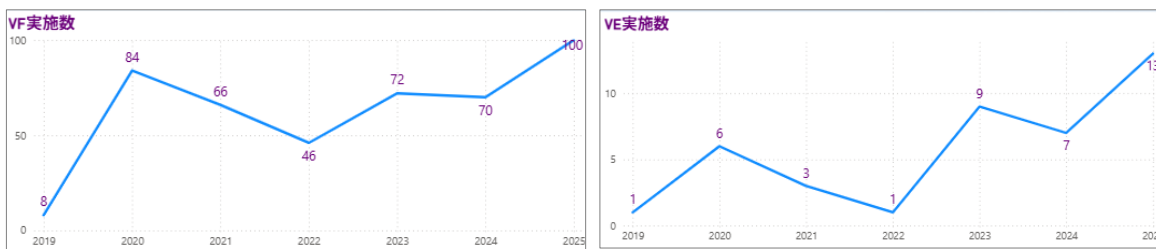
3) 装具診および義肢/装具作成数



年間の総処方件数は 38 件と、前年並みの安定した推移となりました。内訳としては、短下肢装具（AFO）が 19 件から 14 件に減少した一方で、重症例への積極的な介入の証である長下肢装具（KAFO）は 7 件から 16 件へと、228%（約 2.3 倍）の急増を記録しました。

4) 検査・退院後支援

① 嚥下画像検査（VF・VE）



昨年度比+46%と大幅に増大し、過去最高数の 113 件でした。栄養の摂取、ならびに食事を安心して楽しんでいただくために、嚥下機能の適切な評価は必要不可欠です。地域で生活されている方の外来検査も 5 件行いました。

② 退院後フォロー（自院内）

- ・外来リハビリ 57 名（昨年比+29 名）
- ・病棟担当者の訪問リハビリ実施 13 名（昨年比+5 名） ※訪問リハビリ新規は 39 件

③ インソール（足底板）外来 ; 16 名（昨年同数）

④ 自動車運転支援外来 ; 11 名（昨年比+9 名）

II. 学術活動

1. 論文

- 早船微妙稀;生活混乱期を見据えた退院支援のための環境適応力予測スコアの開発,Archives and Bulletin of Kohno Clinical Medicine Reseach Institute vol.75,2025
- 永井嵩人・他;回復期病棟自宅退院患者の BMI 変化から見た栄養管理・入院栄養食事指導の実態検証,Archives and Bulletin of Kohno Clinical Medicine Reseach Institute vol.75,2025

2. 学術発表

演題名	学会名	発表者
生活混乱期における問題発生を予測するリスクスコア：入院中の情報を用いた検討	第12回日本地域理学療法学会学術大会	今野
家屋調査における3Dスキャン導入とカンファレンス円滑化	第9回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会	峰尾

-第 64 回河医研医学会総会（法人内）-

演題名	筆頭演者
離床促進を目的とした作業活動による療養病棟職員の意識変容調査	米山
自宅退院後、電動車いすの導入により活動範囲が拡大しQOL向上に繋がった症例について	梅津
あなたの笑顔が見たくて～お茶会での行動・満足度調査～	守谷
スマートフォン3Dスキャンを用いた家屋調査の有用性に関する多職種アンケート調査	堀田
第三北品川病院における停電時の節電対応の提案 品川リハビリテーションパークにおける停電を教訓として	桑原
回復期病棟自宅退院患者のBMI変化から見た栄養管理・指導の妥当性の検討	荒谷
生活混乱期を見据えた退院支援のための環境適応力予測スコアの開発	今野

III. 課内研修

1. 定期勉強会および研修活動の実施状況

		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
定期勉強会	第1水曜	職種別 (準備)	半期報告 7F、在宅、3H	職種別	職種別	職種別	職種別	職種別	半期報告 3H、7F、在宅	職種別		職種別	職種別
	第2水曜	部署内 (準備)	半期報告 5F、6F、7F	部署内	部署内	部署内	部署内	部署内	半期報告 5F、6F、7F	部署内	部署内	部署内	部署内
	第3水曜	職種別 (準備)	半期報告(19 日) 装具、褥瘡、	職種別	職種別	職種別	職種別	職種別	部署内	職種別	職種別	職種別	職種別
	第4水曜	部署内 (準備)	半期報告 安全(3H)、安全(5 H)、技術部総括	部署内	部署内	部署内	部署内	部署内	半期報告 PT、OTADL委 員、課	部署内	部署内	部署内	部署内
	第5水曜		—		部署内 (予備)			部署内 (予備)				部署内 (予備)	
吸引研修		—	机上試験30.31日	実技	実技試験	—	—	—	机上	実技	—	—	—
《階層研修》 新人	3年目	○	—	○	—	○	—	○	—	○	—	○	—
	2年目	—	○	—	○	—	○	—	○	—	○	—	○
	1年目	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
主任 選抜				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
係長 選抜	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

※吸引試験：品川リハビリテーション病院では、手引書やカリキュラムを定め、検定試験を通過した

職員が吸引行為を実施できる体制を整備しています

2. 業者とのタイアップ企画

内 容	業者・講師
コンパクト DC スティミュレーター GD-800（経頭蓋直流電気刺激機器）	OG技研株式会社
フィジオアクティブHV2（ハイボルテージ）3H	酒井医療株式会社
TAK新機能「家屋調査システム」リリース前紹介および情報交換会	タック株式会社
NM-F1（歩行神経筋電気刺激装置）	伊藤超短波株式会社
車椅子再発見プロジェクト「シーティング研修」	株式会社松永製作所
アームスリングシャツ、車いす用レインウェア	ケアウィルシェアード
たっちあつぷ	矢崎化工株式会社

3. リハビリ機器・製品のデモンストレーション／試用

機器・製品	取扱元
コンパクト DC スティミュレーター GD-800（経頭蓋直流電気刺激機器）	OG技研株式会社
フィジオアクティブHV2（ハイボルテージ）3H	酒井医療株式会社
TAK新機能「家屋調査システム」リリース前紹介および情報交換会	タック株式会社
NM-F1（歩行神経筋電気刺激装置）	伊藤超短波株式会社
車椅子再発見プロジェクト「シーティング研修」	株式会社松永製作所

IV. 臨床実習生受け入れ状況

	養成校	品川リハビリ テーション病院	第三北品川病院	ソピア御殿山
理学療法部門	順天堂大学	5	1	
	東京医療学院大学	2		
	東京衛生学園専門学校	4		
	専門学校 社会医学技術学院		2	
	帝京平成大学	1		
	仙台リハビリテーション専門学校	2		
作業療法部門	帝京平成大学	1		
	杏林大学	2		1
	東京都立大学		1	
	彰栄リハビリテーション専門学校	1		
言語聴覚部門	帝京平成大学	1		
計		19	4	1

年間の実習生受け入れ数は合計 24 名でした。実習を契機として、入職に至った職員がいます。異なる学校の実習生を同時期に受け入れ、実習生同士の交流を通じた学びと成長の場を提供しています。

V. 講演・地域活動・出版など

内容	対象	実施者
健康教室 フレイルを予防しよう	区民	第三北品川病院（外来）
地域ケアブロック会議第一回	品川区高齢福祉課	山崎
地域ケアブロック会議第二回	品川区高齢福祉課	山崎
ケアマネジメント支援部 品川区部会研修①	地域ケアマネージャー	在宅支援部
ケアマネジメント支援部 品川区部会研修②	地域ケアマネージャー	在宅支援部

VI. 各部会（委員・評議員・講師・理事等として参加、順不同）

- ・日本スティミュレーションセラピー学会
- ・東京都病院協会 診療情報 ICT 委員会
- ・東京都理学療法士協会
- ・医療と介護連携地域ブロック会議
- ・城南地区高次脳機能支援事業
- ・区南部地域リハビリテーション支援センター療法士部会
- ・外反母趾研究会（児童の足の計測会、研修など）

《編集・発行》

公益財団法人河野臨牀医学研究所 附属
品川リハビリテーション病院・第三北品川病院・介護老人保健施設ソピア御殿山
リハビリテーション技術部リハビリテーション課